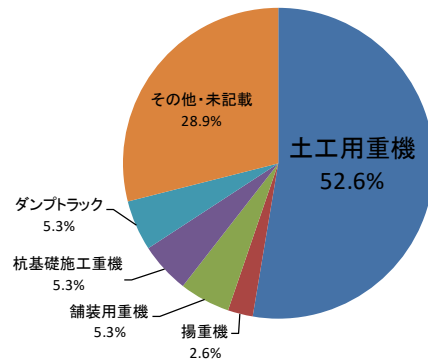


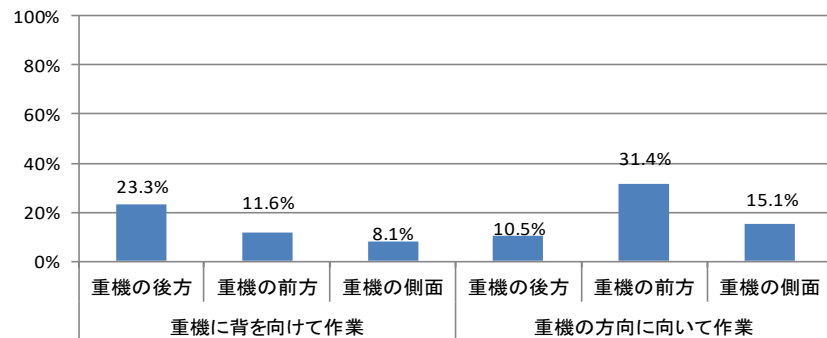
安全啓発リーフレット(令和2年度版)参考資料

重機事故のデータ分析(平成26～30年度SASデータより)

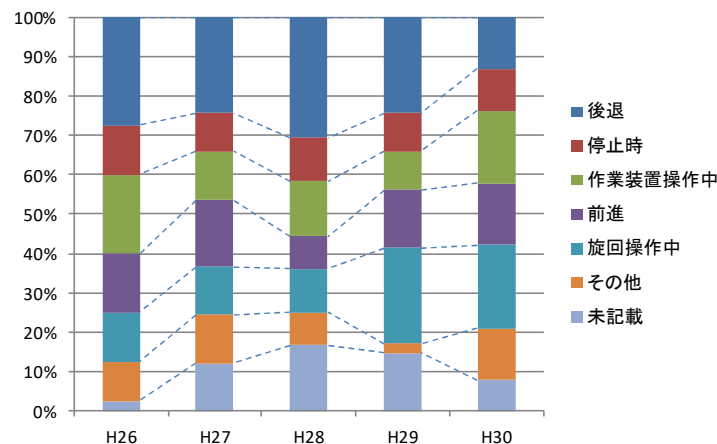
重機名称	事故件数 (件)	割合 (%)
土工用重機	20	52.6%
揚重機	1	2.6%
舗装用重機	2	5.3%
杭基礎施工重機	2	5.3%
ダンプトラック	2	5.3%
その他・未記載	11	28.9%
計	38	100.0%



重機の種類別事故発生状況(平成30年度)



被災者と重機の位置関係(平成26～30年度)



重機の動作状況別の事故件数の推移(平成26～30年度)

[重機事故の内訳]

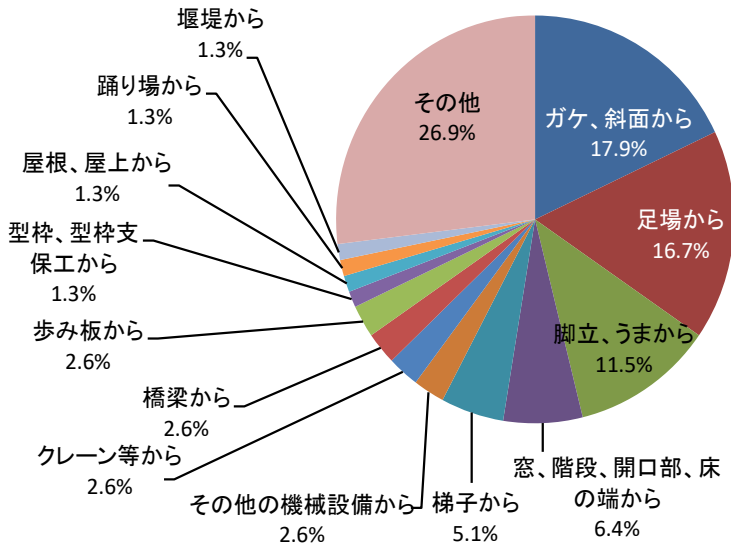
- **土木用重機 (バックホウ等) と作業員の接触が52.6%** と最も多い (平成30年度)
- 被災者と重機の位置関係は、「重機の前方で重機の方
- 重機の動作状況別の事故件数の推移において、「後退」は減少傾向にある。
- 「旋回操作中」の事故が増加傾向にあるだけでなく、「作業装置操作中」の事故も増加傾向にある。**計器設定時やモニター確認時に、周囲確認がおろそかになる傾向がある**

[重機事故の対策]

- 重機事故に対しては、「バックホウ」作業の対策を重点的に行う必要がある
- 「**安全の見える・聞こえる化推進** (作業員への注意喚起：近接警報装置の普及推進等)」「**重機オペレーターに重機操作前と重機操作再開時の確認を促す対策** (旋回・後進時の警告音、ステッカー運動の改善等)」が重要
- 厳密な立入禁止措置が実質的に困難であることを前提とし、**合図誘導者の適正配置**を徹底する
- 作業員と重機オペレーターのコミュニケーション (声掛け) が重要

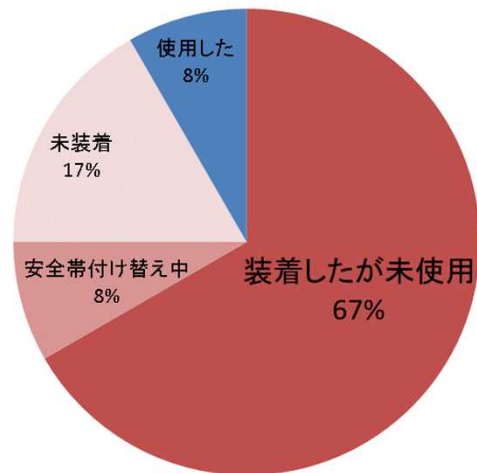
墜落事故のデータ分析(平成26～30年度SASデータより)

[墜落事故の場所別発生割合の内訳]



墜落事故の場所別発生割合(平成30年度)

- 最も多いのは「ガケ、斜面から」であり、次に「足場から」「脚立、うまから」「窓、階段、開口部、床の端から」の順番が多い。(H30年度)
- 「足場から」と「窓、階段、開口部、床の端から」を合わせると、**墜落事故の24.3%**を占めることになる。
- 「足場から」の墜落事故の保護具使用状況は、**「安全帯を装着したが未使用」が67%**であり、安全帯を正しく使用していれば防げた事故が多い
- 「足場から」の墜落事故の職種別では、**普通作業員が46.4%**で多く、次いでとび工の14.3%であり、普通作業員の発生割合が増加傾向である(グラフなし)

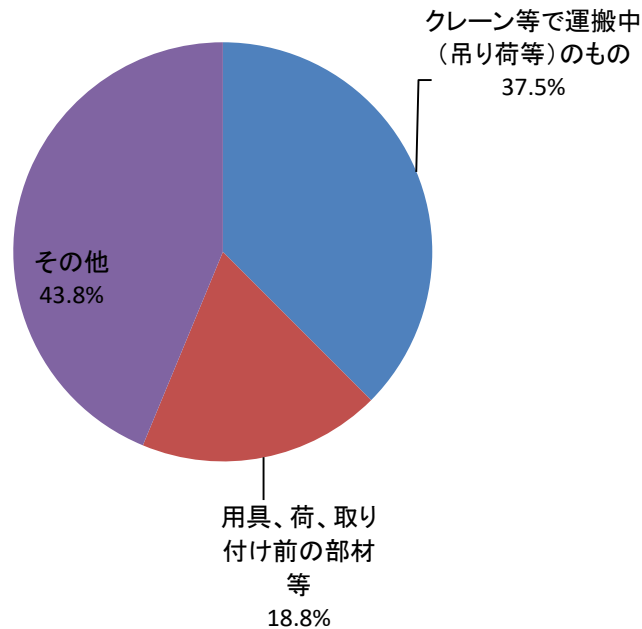


[墜落事故の対策]

- 今後はフルハーネス型安全帯を装着するなどの**安衛則の改正への遵守が必要**
- フルハーネス型安全帯等は装着だけでなく使用することを徹底する
- フルハーネス型安全帯等を使用する場合には、**安全衛生特別教育の受講が必要**

足場からの墜落事故時の保護具使用状況(平成30年度)

[飛来・落下事故の内訳]

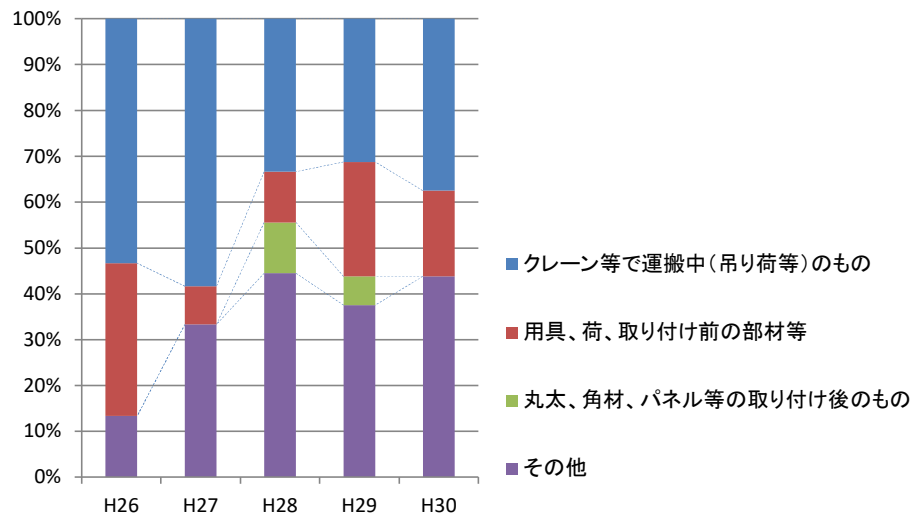


事故種類別の事故発生割合(平成30年度)

- 「クレーン等で運搬中(吊り荷等)のもの」が**37.5%**と最も多くを占める
- 「用具、荷、取り付け前の部材等」が**18.8%**と次に多い
- 間接的な原因として、「吊り荷の下に入る」「上下作業を行っている」ものも多くみられる。特に、吊り荷の受取り側の作業員が接近または吊り荷下に入り、被災するケースが多くみられる
- 飛来事故には、伐採作業や材料取壊しや障害物撤去時において、保護メガネの未使用(装着時の不快感や危険予知能力不足による)が原因で破片が目に入った場合に事故などが発生している

[飛来・落下事故の対策]

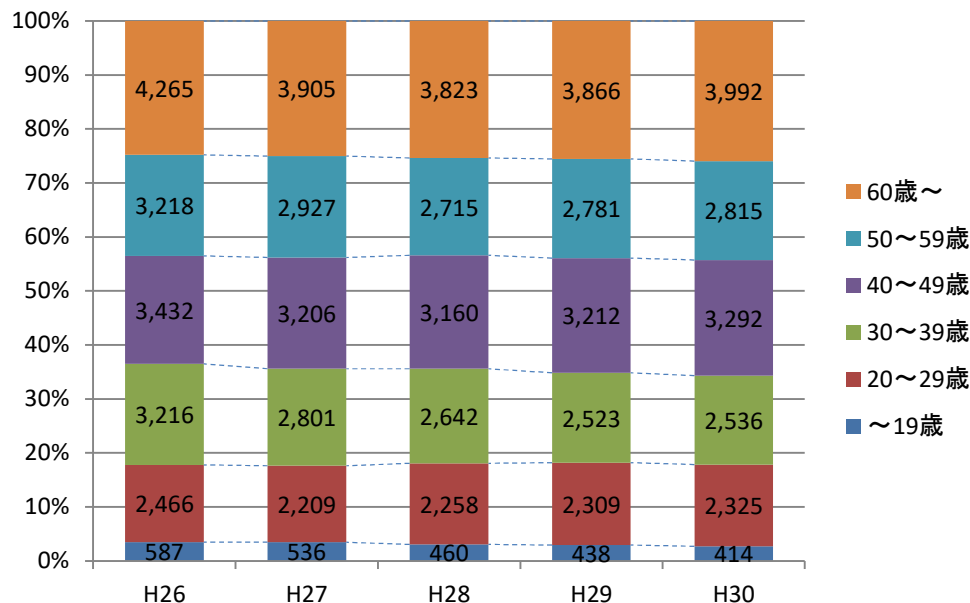
- 吊り荷の落下事故に対する重点的な事故防止対策が必要
- 「吊り荷の下に入らない」「上下作業禁止」という**基本的な安全対策を強化**することが必要
- 吊り荷受取り側の作業員の被災も多く、安易な近接を抑制する対策が必要(介錯ロープ等を用いて吊り荷が腰より低くなった後に近接する等)



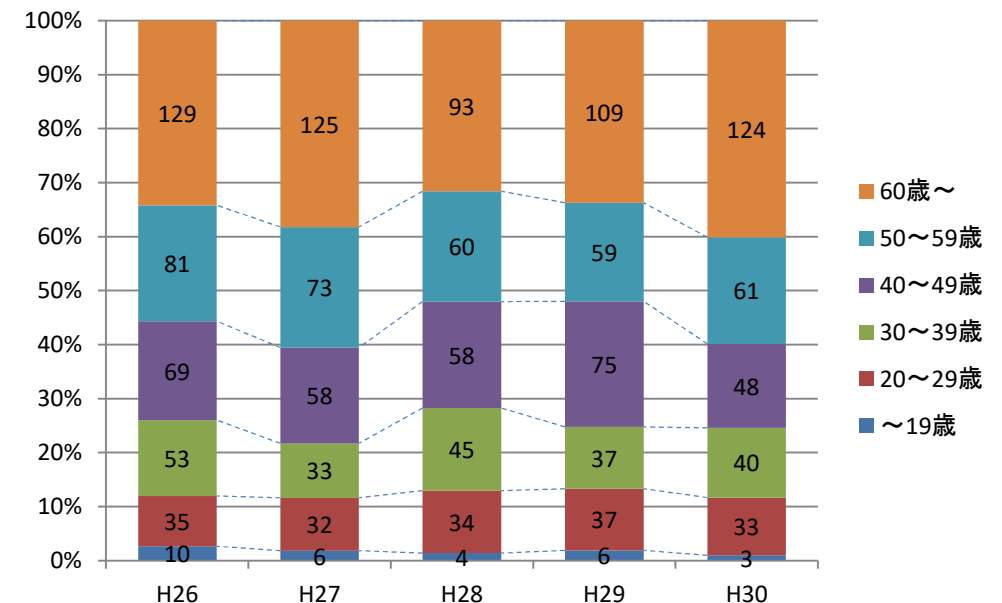
事故種類別の事故発生割合の推移(平成26～30年度)

年齢別の死傷者数の推移(平成26～30年)

建設業における年齢階層別死傷者数の推移



建設業における年齢階層別死亡者数の推移

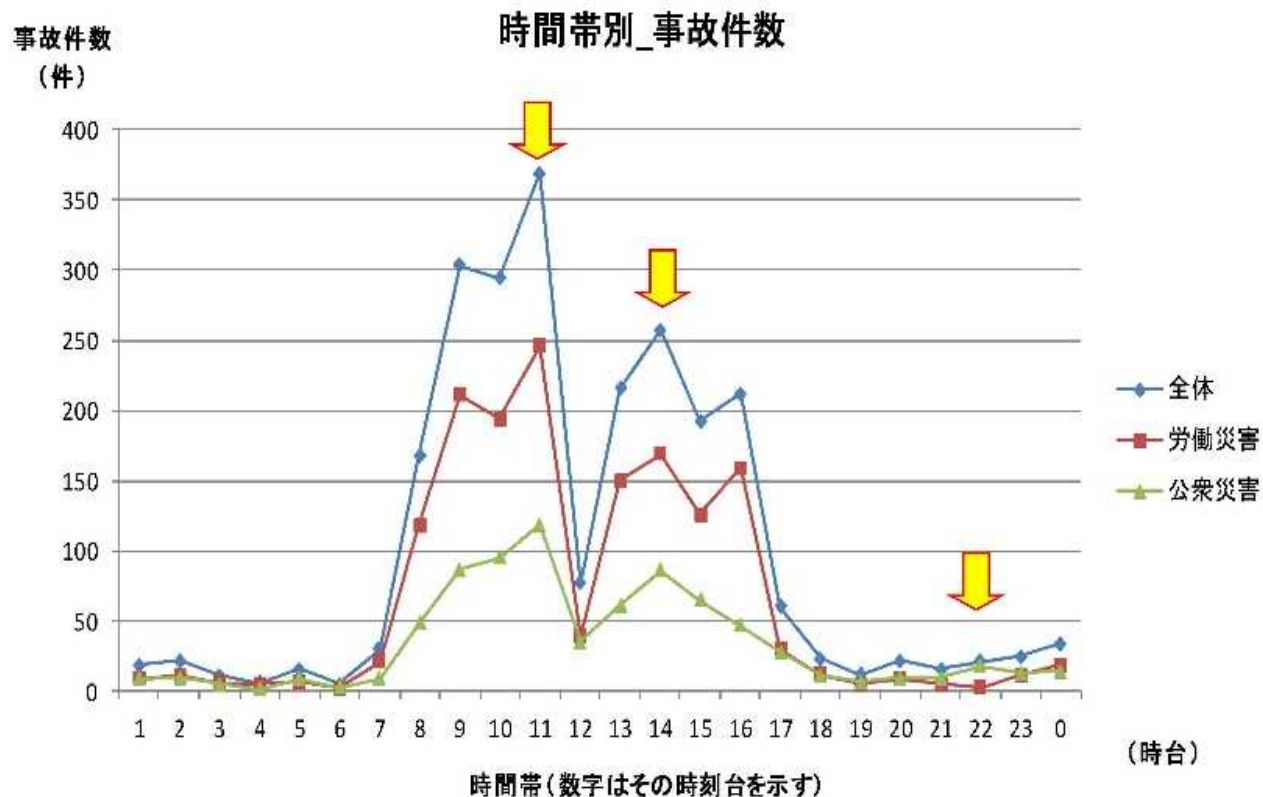


[出典:厚生労働省 労働災害統計「労働者死傷病報告」による死傷災害発生状況(平成26～30年 確定値)]

- 過去5年間の年齢別の死傷者数及び死亡者数の推移は以下の通りである
 - ・ **死傷者数**の最も多いのは60歳以上であり、H28から増加傾向にある
 - ・ 10代の**死傷者**の割合は、就業者数の減少の影響もあるが、近年減少傾向を示している
 - ・ **死亡者数**は年度により異なるが、最も割合が多いのは60歳以上であり、次いで50歳代、40歳代、30歳代の順である



- 一般には年齢が高いと経験が豊富だが体力や俊敏性の衰えが懸念されるため、現場の安全管理体制を充実させ事故を防止する必要がある

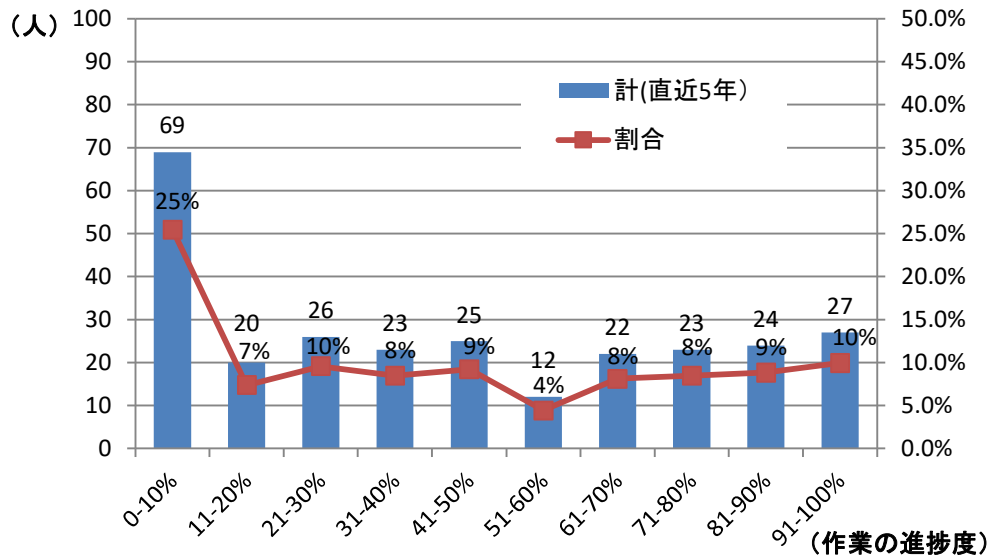


[時間帯別の傾向]

- 午前、特に11時台に事故発生のパークが出現し、午後は14時台に多くなる
- 上記の傾向は労働災害、公衆災害に共通している
- 夜間作業では、公衆災害で22時に小さなパークが発生する傾向がある

工事・作業進捗度別の事故データ分析(平成26～30年度SASデータより)

【工事・作業進捗度別の傾向】



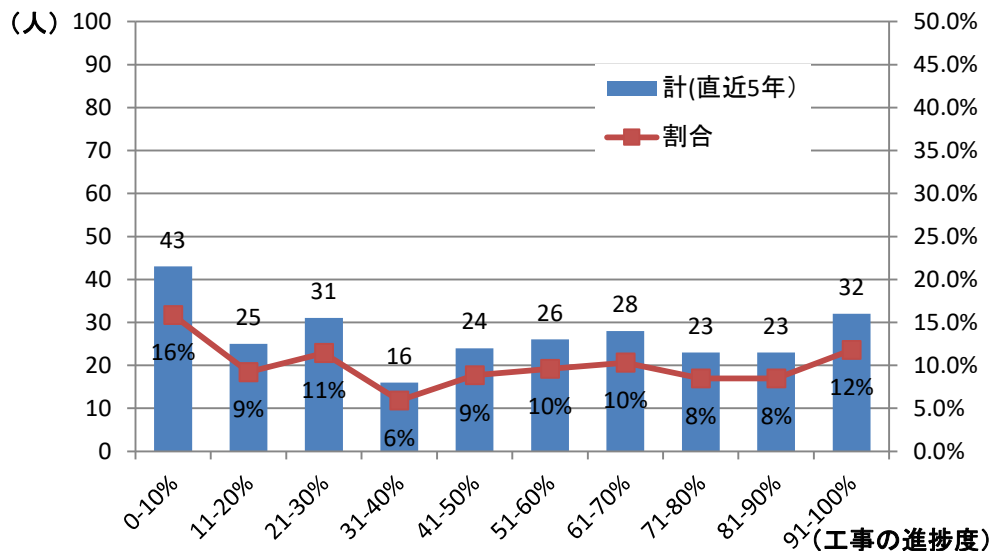
【作業進捗度別事故件数】

○ 作業初期段階(～10%)における事故件数が全体の25%を占めており、飛びぬけて多い

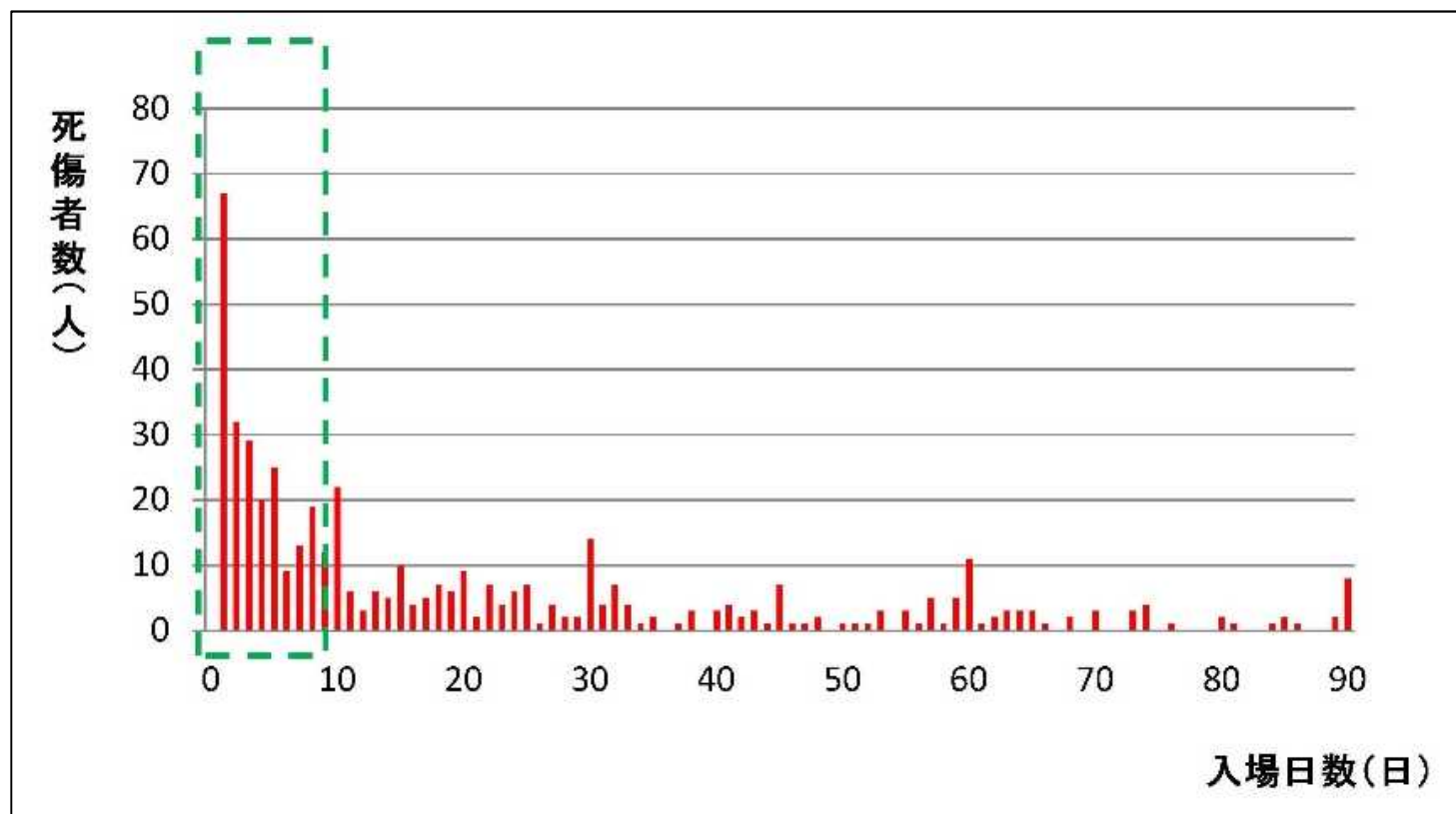
【工事の進捗度別事故件数】

○ 工期の着手時(～10%)及び工期末(91～100%)における事故件数が全体件数の約30%を占めている

作業進捗度別の事故について(平成26～30年度)



工事進捗度別の事故について(平成26～30年度)



入場日数別の事故について(平成26～30年度)

[入場日別の傾向]

- 入場1週間で、全体の1/3の事故が発生
- 特に初日の被災が突出している